

天下第一品
 知恵秤二号
 人品區別所



豚部應賀著



解

定價三錢五厘



〇 是れ智者も萬事轉をぬ前に捉をつけ
 バ悔と希なり愚者も己が心ふあゝろを
 のちひざれば譬へ器物と破してものちあ
 まさありさまに何事も初てあやまる時その
 不肖と背て其心といはまでも忘れざま
 バ二度のやまゝあゝろく殊にその意万
 事に移るバ愚者の智者とある由他をり
 免は吾心と師とて萬の業ふころとち
 〇 是む自然大智の門小いものぞりー

官許 明治七年三月十九日

智恵 評二号

戯速

服部應賀著



小人間居して不善を為し君子を見て厭然として
 其不善を捨て其善と著とも其肺肝を視が如くあゝろ
 何の益もあるんこといつの誠不むべからうなされバ人智
 試所不て第一第二のや濟第三番に呼る者ハ白波泥
 吉といふ小男にて眼を鷹の如くあるが何故小や額の汗
 とぬぐひながら智恵の秤小かゞり其量目百斤ある

に皆くこゝろ驚おどろまきけるうちまよ局長きやう褒美ほうびの御烏帽子ごゑんさつを携たづへて
渠ちが面おもてと御鏡ごきやうを照てし見みまひ傍わらわ小色せうしきたる市兵しへい小左せうざと守まも
固からせられてのさうなが「いかに泥どろ舌した汝なの顔かほを智者ちやなり」
ささげ汝なが幼わか年ねんよりの智ち恵ゑのはさらさらつぶさに言上
もべ泥「是これを誠まことお忍おぼ入いれたるかおとむ御ご覧らんのごく私わたくし
ふせい智者ちや杯みづといわひもよろば「いやく此こゝろ秤はかりの目めに
「いへ」泥「あゝあゝうへち童どうの時ときを申まをらげん嗚呼ああがまゝくも
私わたくしも高たかき竹馬たけうまにてよく走はり鐵てつ胴どうの當あた独ひと樂たの唄うた廻まわり面めん

歩あみぞも上う手てかりが今いま其その智ち恵ゑ目め方かた小こかかるといへ
ども御ご烏ゑん帽子さつと頃ころのち急いそとむでんと奉たごらねば
下げ品びんの白しろ紙しとまかりて早はやく御ご暇じまとくだし玉たまへ長扱とく
汝なを眼めくら鼻はなへ抜ひく智ち弁べんたる夫それ等ら目め方かたおなるもの
おあゝ汝なその汝なの奸えん智ちと号ごうして人ひとを偽いつはりり利りを得える
智ちなれば褒ほう美びとお詠えいり白しろ紙しとてさささむ汝なが今いまの
挺たけ事ことにも友とも達たちの品しなととかまめ取とる事ことがあらう「お仰おほ
のぶとくおさをさうち手て習じゆにゆきて他ほかの紙し筆ひつをとり
事こともまゝあまゝとが成人せいじんとなりてハ其その心こゝろをかたく改あらた

めま^長「イヤク」一廉の奸智^{えち}であればこそ百斤の目方が
あま^泥「そまをい」いつぞや湯屋^{ゆや}でりのりと他の着類^{まきふ}と
きて戻^{もど}りま^長「こごがぶさる」イヤそま^長「ばる」でもまご目
方に合^あぬま^泥ごそのま^泥りま事^じがいくらもあろう^泥「イヤそ
れ^泥く此間^{ねけらう}扱^あ裏^{うら}をい^泥「ま^泥」こ^泥「こ^泥」下物^{しももの}が風^{かぜ}に^泥とん^泥
肩^{かた}おかりま^泥「こ^泥も^泥あ^泥く^泥」夫^{おれ}を持^もか^泥へ^泥「ま^泥」て賣^{ばい}ま
「ま^長「ソ^長夫^{おれ}等^らも人^{ひと}目を盗^{ぬす}む奸智^{えち}なれども上品^{じゆうべん}の智^ち
とい^泥「ま^泥れぬま^泥」百^{ひゃく}斤^{しん}に^泥か^泥る智^ち恵^えの^泥こ^泥ら^泥ま^泥ぎ^泥が^泥あ^泥く
て^泥「あ^泥」ぬ^泥「イヤ^泥」り^泥聊^{いささか}も^泥お^泥さ^泥り^泥ま^泥せ^泥ぬ^泥「あ^泥」け^泥ま^泥ば^泥是^ぜ非^ひ

が^泥「あ^泥」さら^泥は^泥汝^{なんぢ}が^泥懐^{ふところ}の^泥品^{しな}を^泥去^{おと}し^泥へ^泥出^だせ^泥「イヤ^泥」此^{こゝ}紙^しの^泥ま^泥の
う^泥ち^泥の^泥何^{なに}も^泥か^泥ま^泥さ^泥も^泥へ^泥是^{こゝ}を^泥御^ご免^{めん}く^泥ま^泥さ^泥る^泥ま^泥「と^泥否^{いな}む^泥」
と^泥市^{いち}兵^{べい}が^泥取^と上^あて^泥ま^泥「い^泥」ご^泥せ^泥る^泥紙^し入^{いれ}の^泥う^泥ち^泥より^泥一^{いち}封^{ふう}の
手^て紙^しを^泥取^とい^泥ご^泥「讀^よみお^泥「ハ^泥」り^泥て^泥ま^泥「と^泥膝^{ひざ}を^泥り^泥ち^泥「イヤ^泥」泥^ぬ吉^{きち}
此^{こゝ}手^て紙^しお^泥て^泥汝^{なんぢ}が^泥智^ち恵^えの^泥め^泥か^泥さ^泥り^泥や^泥く^泥ま^泥「つ^泥」ま^泥て^泥先^{まへ}
頃^{ころ}我^{われ}家^けへ^泥且^{かつ}那^な寺^{てら}より^泥急^{いそ}用^{よう}の^泥文^{ぶん}通^{つう}が^泥ま^泥「其^{その}文^{ぶん}言^{げん}
ふ^泥と^泥昨^{きのう}夜^よ何^{なに}者^{もの}と^泥も^泥あ^泥ら^泥ま^泥「御^ご墓^ぼ所^{しよ}と^泥打^{うち}倒^{たお}し^泥候^{こう}間^ま早^{はや}
々^た御^ご見^み分^{ぶん}下^{くだ}さ^泥る^泥ま^泥「且^{かつ}無^む人^{ひと}の^泥折^せ柄^{がら}急^{いそ}使^{つか}相^あ頼^{たの}候^{こう}間^ま御^ご
氣^きの^泥毒^{どく}を^泥が^泥「使^{つか}賃^{ちん}百^{ひゃく}匹^{びつ}此^{こゝ}者^{もの}へ^泥御^ご遣^{つか}し^泥下^{くだ}さ^泥る^泥ま^泥「候^{こう}と

認たれば使賃の外に支度代までを遣し早速寺へ
人を遣しけし跡方もなき偽其う人寺へとまじ我
名前を以て風呂敷と傘を衒し者あり其時の手紙の
文と汝が持し此手紙とい同文同筆あるは我家と寺
のかたりと汝ふさひまるその謀金銭といさぐみれども
凡慮の及ぬ奸智のはさらき感心せし。いかに一坐の者
達渠がぶとき奸智の者又手をかへ品をうへて衒とま
る事もやあれば家族と勿論下女下男も油断をせし
いたさまべしさて此者も黒印にて免されねばまぐ

さよ糾問所へ送るべし陣のかたへひらせける此折
ふし外國人入きたりて局長の前へいきてこれ今
此所を通りあぐら表札を見るに大世界ふ二ツと書き
智恵の秤ふて人智を言とあるが吾多年究理學を
弁論して天地間の理をききむればとが上ふこの智者
ハ世界になきと思へども其量月何程ある夫を云
ることを希望せし夫をみるもやまきとあるが見らるる
とく今日の試験人いま終ざれば番外に加入する
成がし明且来りなば貴殿の智恵何程といふと

過分の送物ハ
 后小利を得るの
 知恵あり

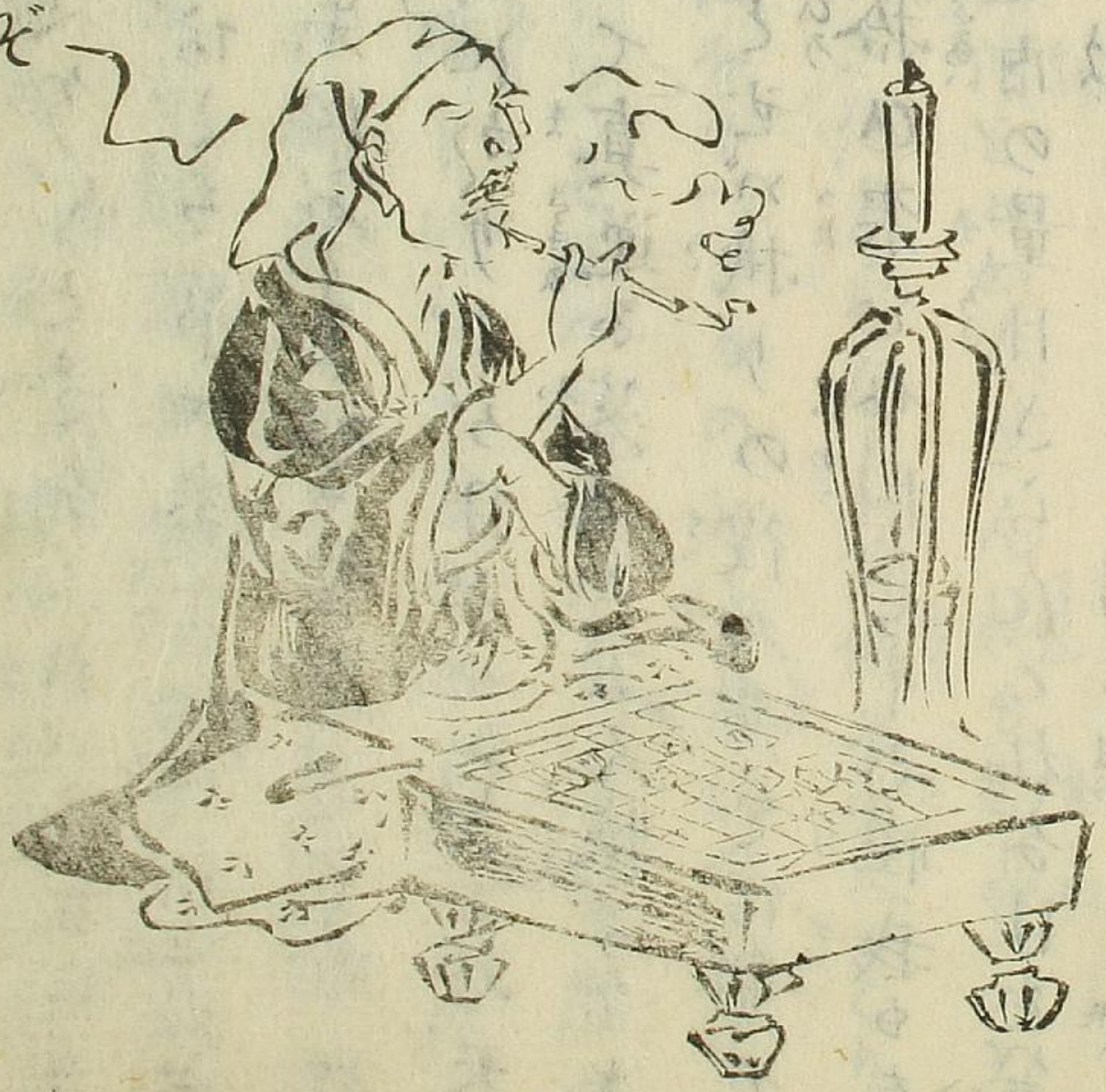
「こゝろ」
 うつろひの
 細と
 コーリーの
 ちまうへ
 及物とこまうへ
 まつとこいし
 百あませといふ
 ちまひらるひ
 百あませといふ
 百あませといふ
 志まぬといふ



憎くはる

盲人
 智眼とりつ
 将棋を
 といふ

「土風」
 どり火がまへ
 将棋をへぬ
 まのてまらる
 ハテは月もさ
 ふとあうる



スミ

試^シ檢^{ケン}まべー今日もペケくと手^てをふればうるはき
あぐ^{あぐ}出てゆくその何とち^ち第四番^{だいよんばん}各北内^{かくほくうち}と呼^よわげ
らまて北内^{ほくうち}の鼻^{はな}の先^{さき}にあぐさがる智^ち惠^ゑの全^{ぜん}願^{ねん}此
あぐ^{あぐ}いげお御^{おん}秤^{ひかり}にかりーが目^め方^{かた}がみきあや天
井^{てい}へえねらげらまて真^ま逆^{さか}お落^おるこぬん懐^{ふく}よりさ
まぐの品^{しな}とと望^{のぞ}かとせが掛^かりの役^{やく}人^{ひと}声^{こゑ}をいげて
笑^{わら}ひるがうそれを拾^{ひろ}ひ渠^かと伏^ふ抱^{かか}せし小^せ怪^が我^{われ}もな
けまが大^{おほ}音^ねに各^{かく}北^{ほく}内^{うち}の量^{りやう}目^めさらたこれまけま平^{へい}
の字^じの朱^{しゆ}印^{いん}お候^{あう}と呼^よとまぐ局^{きよく}長^{ちやう}渠^かと招^{まね}がれて一^{いち}汝^に

かたりさま初^{はつ}あり子^こ細^こあると見る今^{いま}取^とおとせし品^{しな}
かまにるるを^をされば何^{なに}とちかくさん私^{わが}も館^{くわん}賣^うのお
どく御^{おん}烏^う帽^{ぼう}子^こを頂^{いただき}きたくぞんとて俄^ふ宅^{たく}へまどり
何^{なに}り智^ち惠^ゑの目^め方^{かた}にるるべきものどと尋^{たず}ねて持^もてる
品^{しな}と只^{ただ}今^{いま}取^とおとせしとまるのち是^{こゝ}なりハテ智^ち惠^ゑの
目^め方^{かた}にるる品^{しな}とい珍^{めづ}しいをまらるんとや^やおれハ
文^{ぶん}珠^{しゆ}菩^ぼ薩^{ざつ}と辨^{べん}天^{てん}の御^{おん}影^{かげ}でおさるそ由^{よし}文^{ぶん}珠^{しゆ}ハ智^ち
惠^ゑのかたまり弁^{べん}天^{てん}ち智^ち惠^ゑ弁^{べん}財^{ざい}を守^{まも}るといふを
いま^{いま}御^ご存^{ぞん}トこれるきり^{きり}是^{こゝ}ハ一段^{いちだん}のちひはきまシテ

そのまんふやの面々何也へにのり「されば大般若を
翻譯すれば大智慧のことも承りませうた也へ大えん
みやの宅にまきまき子供控の小般若ふれも智慧の足
にもと持參をばいたしませう「さちく聞ばきくやど
おかいまとうるその外にも何もない「いせまごりりま
まる此胴巻の中ふ古金と大札で千両腹おまいてお
まきまき「そまハまご何の為ふぞ「何の為とい曲もな
ひ此世の中に何が貴ひとみふこととて金不ど貴由
のちまけまハ大金と持バ愚者の私の方へも名高き

智者學者がぶぶつて且那樣ぢやの福の神トやのと
たつとむのを見ふつつけ此世の中も智者ハ貧く
愚者も福貴とさとりませうた私。その貧の智者を
願ふ望もあけまどゆ折み「あの吝い金をりてども
無智短才杯と影むいをれるが口おけまどおのれ
やれ清貧獨福兼帯の身とありて御烏帽子を
冠さまうに智慧の守りと身おつけ「其功徳
さらにもまきハそもいっあるいそれらるとう御教訓を
希ふ「つよくとそとひ「都て福者もわさくまにて

一生をいやまるのからが汝もまゝやうちぶ猿ちぶ智恵と
捨すて正身ま小智門ちの扉ひらをひらくんとやうせば吾よくさと
まべしまも愚者おろは足事あをあらねば天上へはかへ
ままでも慈心あま限りなきやへ寝ねても覺さても心を苦くるしめ
大金おほを残のこして一生を終おれども其子其意いを續つねば
家名いへと失しふ者ものままりり是子孫こと見る智恵ちの眼め
がなきやへありささて智者ちも足事あと一いれば貧ひんなれ
ばひんひんおままりりせて樂たのがやへへらと腹はらをやむといいああ汝なが
家いへへ入い込こ智者ちも衣食住い小奢ちをを尽つせばはままぬと

口くちにいへどどづづつつりりはまつつと大晦日おほ智恵ちとあるもの
弁古べんでも一夜いが越こねば留守しゅとほほひ年中愚者おろに
頭あたまららぐぐんんととででハ智者ちといいたままひ汝な文珠ぶん弁天べん
の御影おんと身みおおけけて智恵ちの目めがま増まりのるるるババ經書きん
箱はこと脊せ負ふても學まな者ものににるる大般おほ若にははららののとと轉讀てん
風かぜがか悪わるくく除のるるババ画えふふかかいいと名な劍けんと見みても眼めくく血ちの
出いるるままとももああららううくくおお祈いのりりやくやく金持かねの衣えと着きことと懐ふ
へ金かねもも涌わびびさまさまババ富とみもも徳とくもも其その得えるる道みちとももつつててせせざざればれば
招まひひでもも益えきありり汝な今いま智恵ちの眼めをを開ひききままくくババままづづ両眼りやう

とあるものとして心をもつて物を観れば見へぬ処も見へる
 あり一事の悟ハ万事おろしはる會得也きしうとのこまハ
 可らりがやく今日まで定理おろしき闇純の身も公の
 智燈をうけしさとて開明の冥加の為此千両ハ學入へ献じ
 れば今一度御秤おかしと願ふまうせまをハち秤お築
 て見れば一リンの愚者の身も一念頓登の智恵の量目百斤お
 頭ハれ一ハ局長御烏帽子お添て長者の家名と賜ハリける

第三号 局長と外國人と究理の問答の条

智恵秤二号終

紀元二千五百三十四年五月 万直先生新著述表題

知恵 練林 齊曉
 白虎 豹 生先
 市 虎 豹 画

和談二才圖笑同
 新理文解 五穀祭号二画

世の中のおを代智て思ふ人
 とてそのの清静 全と部
 世界大一新お困へりて名を
 とらうとの清静

東京書林仙鶴堂 浪花町 小林喜右衛門

Handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side of the page. The characters are faint and difficult to decipher, but appear to be organized into several columns.

三卷

